

## 古文に「親しむ」ための授業開発

### —多読と併読による意識変化の検証—

国語科 渡邊寛吾、戸田康代

国語科における次期学習指導要領の変更点で、特筆すべき点は科目の変更にあると考える。中でも1年次「国語総合」の一領域であった古典分野が、「言語文化」として一つの科目として立てられるという、初期段階でのこの変更は非常に大きな意味を持つであろう。加えて、その学習指導要領の「2 内容」〔知識及び技術〕の(2)のイ、ウの冒頭が共に「古典の世界に親しむために」とあることに注目したい。その上での、「作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解する」(イ)ため、また「古典を読むために必要な文語のきまり、古典特有の表現などについて理解する」(ウ)ための授業の在り方について考えて行く。

従来、『伊勢物語』で実施されてきた授業の多くは、教科書に載る幾つかの章段の学習と基本的な知識項目の確認というものであっただろう。そこで今回の授業研究では、『伊勢物語』を対象として、教科書掲載分以外の章段も含む多読と、その解説や古典文学についての評論などの併読も行うことで、生徒の学習態度や理解がどのように、どの程度「親しむ」ものとして変移するのかについて検証し、これからの古典教育について考えたい。

<キーワード> 学習指導要領 伊勢物語 意識調査 アンケート

### 1 序

国語科における次期学習指導要領の変更点で、特筆すべき点は科目の変更にあると考える。具体的には、以下のような状況である。

1年生	国語総合	→	現代の国語／言語文化
2・3年生	現代文A・B	→	論理国語／文学国語
	古典A・B	→	古典探究
	国語表現	→	国語表現

従来は、1年次では内容よりも「導入」という観点からであろう、国語を一纏まりで捉えて「国語総合」の中に現代文と古典が共存していた。また2・3年次では現代文、古典と内容で分かれるものの、それぞれにAとBとして生徒の理解、到達目標の違いによって二つの科目が設定されていた。それが今回は、1年次の「国語総合」を学習内容によって評論、小説等を扱う「現代の国語」と古典を扱う「言語文化」とに分化させ、2・3年次では同一分野のAとBを廃止した上で、現代文は、その内容によって評論等を扱う「論理国語」と小説等を扱う「文学国語」とに分け、古典は「古典探究」という科目に一元化される。なお、国語表現は単位数の増加はあるものの科目としての変更はないようである。ここから窺える科目変更の要点は学習内容、分野による科目の統廃合と言えるであろう。

そのような中であって注目したいことは、1年次の「国語総合」が現代文分野の「現代の国語」と古典分野の「言語文化」に分けられ、それぞれが一つの科目として立てられたことで、中でも「言語文化」について注目したいのである。何故なら「言語文化」、所謂、古典の学習は多くの生徒達にとって、好

意的に受け入れられるものではなく、逆に、避けようとされるものであったことが折々のアンケート調査などから指摘でき、その古典の学習を高校1年生の時点で一つの科目として設定してきているからである。例えば、安野葵氏「大学生の古典力調査報告Ⅷ～平成27年度横浜国立大学教育人間科学部学校教育課程1年次生の古典に関する関心度調査」(『横浜国大言語教育研究』No42 2017. 3)でのアンケート調査に拠れば、小学校教員を目指す大学生の思いとして、

古典の面白さを知り、好きになりたいと感じている人が多い。高校までの教育の中では、古典の面白さを感じるができなかった人が多いのである。

と書かれている。

では、その意義はどのように理解されるべきものなのであろうか。現行学習指導要領と次期学習指導要領の記述の違いから考えてみたい。まず、現行の学習指導要領の「国語総合」では、「言語文化」について「1 目標」に、

国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。(傍線一引用者、以下同じ)

と記してある。国語の尊重とその運用能力の向上の一環として、言語文化の学習があると読める。その上で、指導内容については〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕の中に、

(1) 「A話すこと・聞くこと」、「B書くこと」及び「C読むこと」の指導を通して、次の事項について指導する。

ア 伝統的な言語文化に関する事項

(ア) 言語文化の特質や我が国の文化と外国の文化との関係について気付き、伝統的な言語文化への興味・関心を広げること。

(中略)

ウ 教材は、次のような観点に配慮して取り上げること。

(ウ) 言語文化に対する関心や理解を深め、国語を尊重する態度を育てるのに役立つこと。

(中略)

(ウ) 我が国の伝統と文化に対する関心や理解を深め、それらを尊重する態度を育てるのに役立つこと。

(ウ) 広い視野から国際理解を深め、日本人としての自覚をもち、国際協調の精神を高めるのに役立つこと。

とある。現行の学習指導要領には「関心」という言葉が繰り返し出てきている。

では、次期学習指導要領で新たに設定される「言語文化」とは、如何なるものなのであろうか。次期学習指導要領での記述は、一つの科目として目標、内容などが記されることから、当然のこととして、従来よりも文章は大幅に増加し、詳しいものとなっている。まず「1 目標」では項目としては三つ示されるのだが、第一の目標として、

(1) 生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに、我が国の言語文化に対する理解を深めることができるようにする。

と記される。その上で、「2 内容」の〔知識及び技能〕の「(2) 我が国の言語文化に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する」を見てみると、その第2、第3項目に、

イ 古典の世界に親しむために、作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解すること。

ウ 古典の世界に親しむために、古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解すること。

と書かれていることに気付く。つまり、「作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解すること」、「古典を読むために必要な文語のきまりや訓読のきまり、古典特有の表現などについて理解すること」は「古典の世界に親しむために」あるというのである。そして、当該箇所を次期『高等学校学習指導要領解説 国語編』では、

古典の世界に親しむとは、古典の世界に対する理解を深めながら、その世界を自らとかけ離れたものと感ずることなく、身近で好ましいものと感じて興味・関心を抱くことである。

と説明している。理解を深めること、また興味・関心を抱くことを求めることは現行指導要領にも見られたものだが、ここではその興味・関心の在り方について「その世界を自らとかけ離れたものと感じることな」い状態、つまりは「身近で好ましいものと感じ」ることが付け加えられている。

そこからは、「興味・関心」とだけであった今までの在り方をより明確に示すことで、「言語文化」、つまりは古典に対する学びの状態をより一層、能動的なものとして、1年次より位置付けようとしているものと判断するのである。

## 2 「親しむ」ことに至るために

次期学習指導要領中における「親しむ」ことについては、解説に拠れば、

古典の世界に親しむとは、古典の世界に対する理解を深めながら、その世界を自らとかけ離れたものと感ずることなく、身近で好ましいものと感じて興味・関心を抱くことである。

とは、先に見た通りである。勿論、従来から、実践的な興味・関心を喚起しようとした、面白みのある古典の授業は色々と試みられてきている。授業内容それ自体の理解を深めるためのグループ学習や現代語訳、マンガなどの利用、そして学習後に親しみを増すための和歌や文章の創作、紙芝居、演劇の実演、作品や作者についての調べ学習の報告会などが上げられる。

そのような種々の事例を読んでいて気になっていたことは、そこで扱われる作品の時代背景や作品自体の基盤となる予備知識、その情報提供についてである。当然、それらの授業実践の中でも情報提供は行われているのであろうが、報告にはっきりと記しているものは少なく、深い学びを求めながら、その拠って立つべき思考の材料が乏しい中で行われていたのではないかと推測されるものも多いと感じていた。このことは、アクティブラーニングの際によく言われる、その積極的な活動と学び・理解とがなかなか結びつかない原因の一つではないかとも考えていた。

そこで、今回試みようとすることは、次期学習指導要領「2 内容」の〔知識及び技能〕の「(2) 我が国の言語文化に関する次の事項を身に付けることができるよう指導する」の第2項目である「作品や文章の歴史的・文化的背景などを理解すること」に力点を置くことである。そして、その後載せられる〔思考力、判断力、表現力等〕の「B 読むこと」の指導内容として、

エ 作品や文章の成立した背景や他の作品などとの関係を踏まえ、内容の解釈を深めること。

オ 作品の内容や解釈を踏まえ、自分のものの見方、感じ方、考え方を深め、我が国の言語文化について自分の考えをもつこと。

とあり、具体的な活動事例として、

ア 我が国の伝統や文化について書かれた解説や評論、随筆などを読み、我が国の言語文化について論述したり発表したりする活動。

と記されていることに積極的に取り組むことである。

つまり、学習中の当該教材（作品）のみならず、古典に関する諸々の情報を可能な限り提供すること

で、関連分野の情報も併せて、多くの情報を読み取ることができるようにする。そこから現代に通じる、もしくは異なる感性や文化について、その解説を現代文で読み、現代へと繋がるもの、変遷していったものを知り、その上で自身の古典についての理解を促す材料を手に入れていくこととする。そして、それらを繰り返す中で、自分の中で古典との付き合い方、「親しむ」姿勢が培われていくことを目標とする。

### 3 検証方法と取り組み

まず、具体的な実践は『伊勢物語』を対象として行った。本年度、高校1年生で使用している国語総合の教科書は、大修館書店『国語総合 古典編』（国総 345）である。そこには「芥川」、「あづま下り」、「筒井筒」、「あずさ弓」の四つの章段が採られているが、その内の「あづま下り」を除く三つの章段を授業で扱うことにした。

理由としては、『伊勢物語』自体がまさに古典として千年を超える文化的蓄積を持ち、かつ1年生での必修教材であって、多くの教育実践、研究が積み重ねられているものだからである。本校でも以前に「伊勢物語」の教育研究として、『国語総合』（古典研究）の授業開発―「筒井筒」（『伊勢物語』）の習得・活用・批評を例に一」（横井健・他 『研究紀要』40号 2013.3）を報告している。更に加えて、「伊勢物語」には多くの和歌が詠み込まれており、日本の古典文学・文化における和歌の比重は大きく、和歌についての理解は古典の理解に欠くことができないもので、1年次での和歌についての学習は重要であると考えたためである。

2学期に入るまでは、漢文も含め例年の授業と変わることはない授業構成で、文法事項の学習なども含めて行ってきた。そのような状況の元で、次のような取り組みを行った。

- ・授業内で適宜、古典に関する解説や随筆を配布するなどの情報提供を行う。
- ・現代文の授業で俵万智「短歌を訳す」を実施する。
- ・図書室にある書籍から古典文学に関する書籍を選び、特設コーナーを開設する。

上記の内容について幾つか補足すると、『伊勢物語』という古典作品全体についての知見を得るために、生徒全員が『ビギナーズ・クラシックス 伊勢物語』（坂口由美子・編 角川書店）を持つことにし、各自で適宜読んでおくこととした。ただし、それ以外の古典や和歌、そして伊勢物語の解説やコラムの配付は、その配付の有無に拠って興味関心の差が生じるか、どうかを検証するため、5クラスの内、渡邊の担当する3クラスのみ配付とした。そこで提供したのは、昨今の状況に鑑みてマンガやインターネット上の画像や動画についても行うことにした。

提供された情報の確認は、生徒個人がそれぞれで行うこととし、基本的には授業内で特別に時間を設けて理解することは行わず、授業それ自体は今までの授業形態で行うこととした。現代文の授業で俵万智「短歌を訳す」を実施することは、国語総合の現代文分野の学習で、ほぼ同時期に短歌（和歌）に関する随筆を読むことで相互の理解が深まる学習効果を期待して実施したものである。それは教科書として使用している『国語総合 改訂版 現代文編』（大修館書店 国総 344）に載る俵万智が書いた随筆で、『サラダ記念日』が英訳された際、そして自身が「古典和歌」を現代語訳した際に、言葉と短歌との関わりについて感じたことを記したものである。図書室に特設コーナーを開設したのは、やはり授業内で提供できる情報には限りがあるので、自主的な学びを期待し、そのきっかけ作りとして司書の方をお願いして設置していただいた。今回は図書室での調べ学習の時間を取ることはしなかったため、時折、その利用を促すにとどめた。

そして授業のまとめとして、『伊勢物語』の中での「和歌」の働きについて、生徒達の考えを記述してもらうことにした。そこから、提供された情報などを活用しての主体的な学びを行い、自分なりの理解へ至っているか、どうかについての確認とした。

これらのことが実施前と後で、どのように生徒達の意識に影響を与えたのか否かについての検証として、古典についてのアンケート調査を行った。以下、そのアンケート結果について次章で見えていくこととする。

#### 4 アンケートまとめ

授業前に行ったアンケートでは、古典、及び古文、漢文についての好き、嫌いは次のような状況であった。なお、今回対象となった1年生の在籍数は200人であるが、実施日の欠席、記入漏れ、未回答があり、合計は一致していない。

Q 1. あなたは授業として「古典」は好きですか？

はい ① ・ ② ・ ③ ・ ④ いいえ  
27      64      70      29

q 1. あなたは授業として「古文」は好きですか？

はい ① ・ ② ・ ③ ・ ④ いいえ  
33      66      76      21

q 2. あなたは授業として「漢文」は好きですか？

はい ① ・ ② ・ ③ ・ ④ いいえ  
22      65      76      35

事前に行ったアンケートでは古典、古文、漢文に対する好悪の状況はほぼ半々であった。それに対する理由をQ 2とした。まず、好きな理由としては、

- ・ 昔と今の考え方の違いが楽しいから
- ・ 昔の人たちがどんな思いで書いたのかなって考えるのが楽しいから 分からなかったことが 分かった時うれしいから
- ・ 全体をはじめて読んだときはまったく話がりかたにの、辞書をひいたり授業をきいて、だんだんとその頃のことわかる気がしておもしろいから。
- ・ もともと国語は好きだし、だんだん意味が分かってくるのがおもしろい。

などが書かれており、嫌いな理由としては、

- ・ あまり勉強していて楽しいと感じない 魅力を感じない
- ・ 古文・漢文どちらも現代とは違う意味で使う言葉や法則を覚えるのが苦手で、分からないと授業も分からなくなるから
- ・ 難しい 何が書かれているのかわからない 覚えるべきことを覚えていないせいでだけど、覚えるのも多くて大変

などとあった。なお、漢文についての嫌いが古文よりも多いのは、漢字に対する苦手意識のためのものである。続いては「古典文学・芸能」への興味関心を質問した。それについての回答は下の通りである。

Q 3. あなたは「古典文学」を読んだり、「古典芸能」を観たりしたいと思いますか、またはそれらに興味はありますか？

はい ① ・ ② ・ ③ ・ ④ いいえ

22 43 76 55

興味の有無について、「いいえ」が多いであろうことは想定していたが、想定していたよりは少ないと感じた。そして、Q4はそれぞれについての理由で、興味関心を示した理由としては、

- ・ 能はおもしろそうだから
- ・ 日本史にとっても興味があるので、文学や芸能は当時の人々の生活の手がかりになると思ったから。
- ・ もっと色々な古典文学に触れてみたいから
- ・ 現代と違ったものの考え方や、話の進み方にとっても興味があつて、おもしろいと思うから
- ・ 伊勢物語の小説を少し読んで、おもしろかったので、他のも読んでみたいと思った
- ・ 訳や解説がついているものなら読んでみたいと思う

などがあり、否定的な理由は、

- ・ 授業で古典を読んで、分かるとおもしろいと思うけど、自分から興味をもって読もうとは思いません
- ・ 歴史の物語は好きだけど文法や動詞とかは嫌い
- ・ これから古語で話すことはないし、深く知ろうとは思わないから
- ・ 古典があまり好きではなく興味がありません
- ・ 自分からはむずかしそうでよめそうにない

などがあつた。授業に対しての好き嫌いの理由とほぼ同様のものではあつた。これに続いての間と回答は以下の通りである。

Q5. あなたの身近に「古典」に関わるもの、事項などはありますか。

ある場合、それは具体的には何ですか？

はい ① ・ ② ・ ③ ・ ④ いいえ

17 19 38 121

こちらにも、「いいえ」の回答の多いことは想定されたが、身近に存在する具体的なものとして、ここには「いいえ」と答えた生徒が書いていたものも含むが、「授業」「教科書」と答えていた生徒が22人いた。この「古典」に関わるもの、事項」として「季節の行事や風習、祭り」などの回答も考えていたのだが、そのような回答は少なく、多くの生徒達の考える「古典」というものが授業の極めて狭い範囲で理解されていることを痛感した。最後にQ6として、「その他、古典の授業への要望、古典文学についての質問など自由に書いてください」と自由記述の欄を設けた。そこには、

- ・ 古典を訳すのがまだあんまり慣れていないので、その「こつ」などを教えてくれたら嬉しいです
- ・ 文法がよくわからないのでまた授業をしてほしいです
- ・ 現代語訳のプリントがほしい

のように、やはり授業や学習に関する要望が多く書かれてあつたが、

- ・ その作品の作者のことを詳しく言ってほしい
- ・ おすすめの古典文学は何ですか

など、発展的な学びを求める意見も散見した。

さて、一連の授業を終えて行ったアンケート結果は、次のような状況であつた。まず、古典そのものについての意識の変化についての間と回答は、

Q 1. 今回の『伊勢物語』の学習を通して、古典（古文）について、以前と比べて興味関心を持つことができましたか、理解は深まりましたか。

はい ① ・ ② ・ ③ ・ ④ いいえ

92          71          26          8

であった。続いて、今回の学習で利用したもの、それが役に立ったと感じたかどうかの質問を行った。

Q 2. 今回の『伊勢物語』の学習に際して、利用したものを選んで下さい。（複数回答可）

- 1 国語便覧      2 古語辞典／古典単語帳      3 『ビギナーズ・クラシックス』  
4 配布プリント      5 自宅、図書室などの書籍      6 インターネットの各種情報  
7 その他

Q 3. 今回の『伊勢物語』の学習に際して、理解を深めるのに役立つものを選んで下さい。（複数回答可）

- 1 国語便覧      2 古語辞典／古典単語帳      3 『ビギナーズ・クラシックス』  
4 配布プリント      5 自宅、図書室などの書籍      6 インターネットの各種情報  
7 その他

この利用状況と役に立ったと感じたかどうかについて「利用／有効」の形で、以下「利用」数の多い順に示すと、

・古語辞典／古典単語帳	138／79
・インターネットの各種情報	87／46
・『ビギナーズ・クラシックス』	78／70
・配布プリント	75／51
・国語便覧	57／52
・自宅、図書館などの書籍	14／8
・その他	2／1

であった。古語辞典／古典単語帳の利用が多いことは、単語の意味や助動詞の働きを調べるために当然のことと言えるが、有効の回答数が利用数の約半分になる。インターネットの利用とは、現代語訳などの閲覧としての利用のことであろうが、古語辞典／古典単語帳に見られた有効が利用の半数となることだが、ここにも見られる。理由として考えられることは、生徒達はそれらを利用はするが、自身が思うほどには活用できていない、例えば辞書を利用しながら適切な単語の意味を選べていない、助動詞の意味や働きを判断できていない、またインターネット上の現代語訳などを参照するがそれらをしっかり理解できていないことなどが考えられる。

そのような中であって、今回利用した『ビギナーズ・クラシックス』と配布プリント、そして国語便覧に関して、その総数は多くないが、一定数の利用が認められ、有効と感じた数との関係は大きい。では、古語辞典／古典単語帳などとこれらの違いはどこにあるのかと考えるならば、前者がそこにある内容を自分で考え、判断しなければならぬものであるのに対して、後者はそこにある情報を読むだけでよいという点にあると思う。しかしながら、それを利用し、有効であると生徒が感じたのは、やはり生徒は今自分達が学習している作品に対する情報・知識を求めていることを示しているのではないだろうか。その配布プリントと国語便覧では、渡邊の担当した3クラスと戸田の担当した2クラスで差を設けたので、国語便覧と追加の配布プリントの利用と効果についての結果を示すと、

・国語便覧	渡邊担当	14 (5) / 7 (2) (クラス平均)
	戸田担当	43 (22) / 45 (23)

- ・配付プリント 渡邊担当 63 (21) / 46 (15)  
戸田担当 12 (6) / 5 (3)

となった。渡邊の担当したクラスでは、プリントを配付することもあって国語便覧は基本事項の確認にとどめた。対して、戸田の担当したクラスではプリントの配付は行わなかった。ただ、そこにプリントの利用の回答があるのは、現代文の「古典を訳す」で配付したプリントの利用を示すと考える。結果、渡邊の担当したクラスは、国語便覧とプリントの両者を持つのだが、プリントの利用に比して国語便覧の利用は少なく、それは、国語便覧に載る情報が『ビギナーズ・クラシックス』やプリントの情報に内包されるもので、殊更に利用する必要性がなかったためではないだろうか。

これに続いては二つの質問をした。

Q 4. 現代文で「短歌を訳す」を同時に学習しましたが、それぞれの理解に役立ちましたか？

はい ① ・ ② ・ ③ ・ ④ いいえ

24 84 72 18

Q 5. 図書室に「古典文学コーナー」を設けていますが、利用しましたか？

はい 3 いいえ 195

科目を横断して授業内容に繋がりをもたせること、また図書館との連携することで、学習が深まることを求めたのであるが、この試みは初めてのことで上手く連携できていなかった結果である。特に図書室の利用は、『ビギナーズ・クラシックス』やプリントの利用状況からするともっと利用があるものと想定されるのだが、図書室利用という観点からも活性化を図りたいと思った。

さて、改めて全体の状況を確認したいと思う。まず、この実践を通して、古典に対する好感度は、実施前が①+②、③+④が 91 人対 99 人であったのが、163 人対 29 人となって、一応の成果はあったと考える。つまり、古典（古文・漢文）の知識、学習作品についての情報を今以上に提供することで、生徒達の興味関心を喚起することが可能であるということである。

今後は、提供する情報量の適正値の見極めや生徒への指示の加減、それを学習本体へと繋いでいく方法などを考察し、検証していきたい。何より、この実践は「伊勢物語」に「親しむ」ことが目的ではなく、「古文」、ひいては「古典文学・文化」へ「親しむ」ことを目的にするのもので、そこへと至る取り組みとなるようにしていきたい。

## 5 結

恐らく、今後も現状のままでの古典の扱いであれば、今回ここで提供しようとする知識は無くとも対応することができるであろう。実際、今までの知識の確認手法、テストではやって来ることができていた。しかしながら、今回の改定により、1年生の段階で「言語文化」として古典分野を学習する科目が設定され、それに基づいて2・3年生では「古典探究」が履修されることになった。そこに「探究」とあることに意識を向けるならば、単語や文法事項と幾らかの文学史の知識だけに留まることのない、深い学びへと至るような知識がなければ、それは授業を進めることが難しいのではないかと考える。

今回の検証は、古典に「親しむ」ため、つまりは深い理解へと向かうために必要なものとして単語や文法事項だけでなく、古典の世界、及びその作品についての予備知識の有無がどの程度意味を持つのかを考えることにあり、加えて授業を実際に行うにあたり、それらの情報をどの程度、どのような方法で提供すればよいのかを知るための検証の一例であった。



## 《参考文献・HP》

### 学習指導要領関連

- ・『日本語学』vol.37-3「特集 新学習指導要領 国語の方向性」(明治書院 2018.3)
- ・『日本語学』vol.37-6「特集 国語科における「主体的・対話的で深い学び」」(明治書院 2018.6)
- ・(次期) 学習指導要領  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2018/07/11/1384661\\_6\\_1\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2018/07/11/1384661_6_1_2.pdf)
- ・(次期) 高等学校学習指導要領解説 国語編  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2018/07/13/1407073\\_02.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2018/07/13/1407073_02.pdf)
- ・高等学校学習指導要領の改訂のポイント  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2018/04/18/1384662\\_3.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/__icsFiles/afieldfile/2018/04/18/1384662_3.pdf)
- ・新しい学習指導要領の考え方—中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ—  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2017/09/28/1396716\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/__icsFiles/afieldfile/2017/09/28/1396716_1.pdf)
- ・高等学校国語科の科目構成について  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/068/siryu/\\_\\_icsFiles/afieldfile/2016/04/01/1369033-6.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/068/siryu/__icsFiles/afieldfile/2016/04/01/1369033-6.pdf)

### 伊勢物語関連

- ・『少年少女古典文学館 第二巻 竹取物語・伊勢物語』(伊勢物語 俵万智・訳 講談社 1991.10)
- ・『日本文学全集 03 竹取物語 伊勢物語 堤中納言物語 土左日記 更級日記』(伊勢物語 川上弘美・訳 河出書房新社 2016.1)
- ・『古典を楽しむ 絵で読む 伊勢物語』(山本登朗・著 和泉書院 2016.6)
- ・『伊勢物語を読み解く 表現分析に基づく新解釈の試み』(山口佳紀・著 三省堂 2018.2)
- ・『伊勢物語 学びを深めるヒントシリーズ』(早稲田久喜の会・編 明治書院 2018.3)

## 【附記】

本稿は、平成30年11月14日に愛知教育大学附属高等学校で行われた第38回高校教育シンポジウムでの報告を纏め直したものである。なお、ここでの授業実践は本年度、1年生を担当した渡邊と戸田兩名によるものであるが、本稿の取り纏めは渡邊によるもので、その文責は渡邊が負うものである。

今回の実践については、愛知教育大学国語教育講座 砂川誠司先生に指導、助言をいただいた。この場で改めて、謝意を申し上げる。